

0歳児の発達を促す

リズム遊び・リズム運動の実践



社会福祉法人 愛護会

第二東水沢保育園

保育士 岩崎 加奈子

1. 研究主題

0歳児の発達を促すリズム遊び・リズム運動の実践

2. 主題設定の理由

本園にて、0歳児低・中月齢児8名を担当することとなった。4月当初は子ども達の月齢が低いことから、まずは一人一人の子どもをしっかりと受容し、生理的欲求を満たしながら、肌と肌との触れあいやまなかいなど、保育士との関係作りに努めた。しかし、担当児一人一人の発達の姿を見ると、身体が硬直していて自発的に動かない、あやしても笑わない、目が合わない、保育士が言葉掛けをしても反応がない子がいた。また、発達に遅れが見られ、経過観察が必要と医師より診断された子が4名在籍していた。

そこで、子どもたちの発達をより促し、心身ともに豊かに育てていくためにどのような保育が必要であるかを考え、『ヒトの子として生まれ、真に人間の子どもに育つために』と考案された、リズム遊び・リズム運動に取り組むこととした。このリズム遊び・リズム運動は、“律動”“自由表現と集団遊び”、そして音とことばと行動を調和する“リトミック”の3つの原型を基に創られたものである。

本園の0歳児保育において、このリズム遊び・リズム運動を実践することにより、子ども達の発達にどのような効果を及ぼすのか、また、発達に遅れがみられる子に対する発達の促しとなり得るのかを研究したいと考え、本主題を設定した。

3. 研究のねらい

- ・0歳児のリズム遊び・リズム運動について、理論研究を行い、その内容と意味を知る。
- ・子ども達の情緒の安定を促し、心身の発達をより助長させるために、リズム遊び・リズム運動を実践する。
- ・発達に遅れが見られる子へのリズム遊び・リズム運動の実践と、その成果について分析をし、今後の課題を把握する。

4. 研究の仮説

- ・リズム遊び・リズム運動を保育士と一緒にやることにより、心身の発達が促され、情緒の安定を図ることが出来るのではないか。
- ・リズム遊び・リズム運動を実践することにより、個々の課題を把握し実践を積み重ねることで、発達に遅れが見られる子の発達を促し得るのではないか。

5. 研究の内容・方法

- ・理論研究（専門書研究、園内研修、園外研修）
- ・子ども達の発達の順序性を踏まえながら、実践するリズム遊び・リズム運動の種目を選定し、実践したことの振り返りを行う。
- ・リズム遊び・リズム運動を実践した際、個別発達記録や個別指導計画に課題点や成長発達が見られる点について、細かに記録する。
- ・保護者との連携（情報交換・連絡帳）

6. 研究実践

(1) 理論研究

リズム遊び・リズム運動は、①『律動』、②『自由表現』と『集団あそび』、③音とことばと行動を調和する『リトミック』の3つの原型をもとにして創られたものである。『ブック 齋藤公子のリズムと歌[楽譜集] 齋藤公子記念館(かもがわ出版社)』の中では、0歳児期に大切にしたいこととして、以下のことが書かれていた。

<0歳児期に大切にしたいこと>

①目を合わせて抱く

片方の手で首を支え、もう片方の手をお臍のちょうど裏側にそえ、カエルのように開いた足をそのままお腹につけ正面に抱く。

背骨がゆるやかなS字にしなるように優しく揺すりながら脱力させる。

目が合いにくい赤ちゃんも根気よく抱き続けることで、ほとんどの赤ちゃんは目が合うようになり、その後完全に脱力してぐっすり眠る。

“突き出た脳髓”と言われる目、この時期にきちんと目と目が合った赤ちゃんに今まで脳の発達に遅れが出たことはないのである。

②手の親指と足の親指

0歳児には脳損傷は視神経の異常などにもみられるが、運動神経の発達の遅れにより多くみられる。

中でも、人間特有の言語中枢の発達の遅れは、手の親指、足の親指のうごき（人間だけができる動き）に現れ、言葉がなかなかでない自閉症児たちは、やはり手の親指をあまり使おうとしないし、うつ伏せにした時に足の親指をつけようとする。

0歳児の後期になっても、手指のひらきの遅い子どもは、肩に緊張が強いので、バスタオルを三つ折りにしてぐるぐるとまいて細長い枕のようなものを作り、その上にうつ伏せにさせると、肩が楽になり手指が開きやすくなる。

そうして前におもちゃなどを見せると、子どもは探究本能で手指を開いて取ろうとする、こうした自らの意欲で指をひらかせる努力をすると、言語の遅れを出さずにすむ。

ここで誤解を避けたい重要なことは、“発達が早ければ安心ということでは決してない”ということである。

“這えば立て、立てば歩めの親心”という諺もあるが、生物の進化の過程をじっくりと時間をかけて経、そして順を追って成長することが、一番大切なことなのである。

足の親指の蹴りが弱く、かかとの骨もやわらかく、したがって“土ふまず”の形成の遅れのある子どもは、やはり脳の発達に遅れがみられるのである。足の指の蹴りを使うハイハイ、その他歩く、走る、跳ぶなどの運動や、土山のぼり、階段の上り下りなどを裸足でさせたりすると、これも言語の発達を促す。

③仰向けに寝ながら“手”“足”の運動

まだ首もすわらない赤ちゃんも手足をふって運動している。あやすと喜ぶ。声をたてて笑うということが、喃語を出す前の段階で大変大切なことなので、あやすということは発達上必要不可欠である。声をたてて喜ぶことは発達につながる。

その頃は目覚めているときは上から木製のモビールのようなおもちゃや、手を伸ばせば触れられるようなおもちゃを吊り下げてあげると、動きを目で追ったり、手を伸ばしてつかもうとしたり飽きずに遊んでいる。手だけでなく足も動かし全身で遊んでいるのである。このように手足の振りを十分にさせてやるのが、手指・足指の発達をも促すのである。

以上の理論研究をもとに、子ども達の発達を促すためにリズム遊び・リズム運動に取り組むことが必要と考え、実践した。

(2) リズム遊び・リズム運動の種目の選定

○実践種目Ⅰ「うさぎ」

満2歳を過ぎた子ども達は、健常児であれば、両足を揃えて同時に床から離してピョンピョンと軽く跳ぶ、うさぎ跳びの運動が出来る。これは、子どもの「内なる自然」の成熟度がうかがえる運動であり、軽やかな整理運動である。

両手をうさぎの耳のつもりで上に伸ばし、耳から上は脱力して跳ぶとよい気持ちである。年齢が高くなるほど速い速度で跳べるのが普通であるので、これを観察することによって発達の遅れを発見することができ

る。

1歳児はかかとを上げて跳ぶことができず、足裏全体を床につけて跳ぶ。また、1歳児の前半はまだ足を揃えて跳ぶのが難しく、左右交互に上げて跳ぼうとする。したがって、2歳過ぎても足裏全体を床につけてゆっくりしか跳べない子ども、足を交互にしか上げられない子どもは、発達が遅れているとみることができる。

①ねらい

両足を地につけ、膝の屈伸運動が出来るようになっていく。また、歩行完了後は、保育士の真似をして跳ぼうとする。

②実践方法

保育士が脱力した状態で跳びはねて見せる。

- ・おすわりの頃…介助する保育士は座位の体勢となり、子どもの両脇下部を持ち、ちぐちぐをする。

○実践種目Ⅱ「どんぐりころころ」

0歳の子どもは、健常な子どもであれば、生後6ヶ月前後で寝返りが出来るようになる。「どんぐりどんぐりころころ……」保育者が歌いながら転がって見せたり、大きい子どもたちがリズム遊びをやっているところを見せてやると、間もなく自分でまねして転がろうとする。足の親指で床をけることを大切にする。

この運動の下限は6ヶ月くらいからだが、上限はない。つまり、大きい子どもにも十分に効果があるし、また好まれる。

①ねらい

保育士の口ピアノを聞きながら、自発的に寝返りをするようになっていく。また、左右バランス良く寝返りをする事が出来るようになる。

②実践方法

保育士が保育室内を寝返りして見せる。

- ・寝返りが出来ない子…寝返りをしようと身体を傾けている子には、足をクロスにさせることや、背面が床から離れて回転していくことが出来るよう促す。両腕に力が入ってしまい、回転の妨げになっている子には、両腕を上方へ伸ばすことを促す。

○実践種目Ⅲ「金魚」

床にあおむけまたは、うつぶせになって、からだをくねくねとくねらせる背骨の運動である。

①ねらい

背骨の柔軟性が育まれていく。

②実践方法

腹這いの体勢と仰向けの体勢での2種を行う。介助する保育士は、子どもの両足首を揃えて持ち、左右に身体を揺らす。

○実践種目Ⅳ「こうま」

誕生日間近の子どもたちは、四つ足ハイハイから、ひざを床から上げて腰を高くして高足のハイハイに進み、その後、自分の力で立ち上がるようになる。

このような自然な移動運動をリズム遊びに仕立てたものである。最初は曲に合わせてひざつき四つ足ハイハイである。ホールをみんなで一定方向に移動する。その際、足の親指をしっかりと床につけさせることが大切である。

ピアノを1オクターブ高くすると、ひざと腰を上げて高足ハイハイに移ることにする。このときは、どうしても足の指先をしっかりと床につけなければならなくなる。また同時に、手の指先にも力を入れなければならなくなる。指先がよく動かせない子も、この運動を繰り返しているうちに、いやおうなしに指先を使うようになるので、より発達を促すのである。

①ねらい

足の指を使って床を蹴り、左右バランス良く四つ足ハイハイや高足ハイハイをして前進していくことが出来るようになっていく。

②実践方法

保育士が、保育室内を四つ足ハイハイや高足ハイハイをして見せる。

- ・四つ足ハイハイが出来る子 …足の蹴り方を見て、足の指を使って力強く四つ足ハイハイをして前進していくことが出来るよう促す。

○実践種目Ⅴ「おでこごっつん（柔軟）」

両足を広げて身体を前方に傾け、身体の柔軟性が養われる運動である。

①ねらい

身体の柔軟性が育まれていく。また、両足を開いた状態からの柔軟では、床におでこをつけることが出来るようになっていく。

②実践方法

両足を閉じて行う柔軟と、両足を開いて行う柔軟との2種を行う。

身体が堅めな子には、背中をゆっくりと前方へ押してあげる。

○実践種目VI「竹とんぼ（左右両方への回転）」

身体を回転させる運動である。

①ねらい

身体のバランスを取りながら、回転することが出来るようになっていく。

②実践方法

保育士が両手を広げて、回転したり、静止して見せる。

・おすわりの頃…子どもをだっこしながら、ゆっくりと回転する。

ロピアノの終わりに、静止をする。ゆっくりと子どもと目と目を合わせながら回転することで、回転することへの恐怖心を生じさせないよう配慮する。

○実践種目VII「めだか」

両手を合わせてすばやく走る運動である。

①ねらい

両手を合わせて、バランスを取りながら走ることが出来るようになっていく。

②実践方法

保育士が両手を合わせて、保育室中を子ども達や他の保育士にぶつからないように走って見せる。

○実践種目IX「でんぐり返し」

保育士に介助してもらって、両手を床につき、頭を中に入れながら回転する。

①ねらい

保育士に介助してもらいながら、両手を床について首を胸の下に入れ、前方方向へバランス良く回転することが出来るようになっていく。

②実践方法

介助する保育士は、マットの上に子どもが両手をしっかりついているか確認をし、頭を胸の下に入れることを促し、首元とお腹周りを介助しながら回転をさせる。

○実践種目VIII「かくれんぼ」

走っている際に、保育士の合図で静止し、両手を頭にのせてしゃがむ運動である。

①ねらい

歩行及び小走りの状態から、保育士の合図で静止をし、両手を頭にのせながらしゃがむことが出来るようになっていく。

②実践方法

保育士が小走りをし、合図とともに静止をしてしゃがみ、両手を頭にのせて見せる。

- ・歩行が出来ない子…保育士がだっこして行う。静止の合図とともにしゃがみ、保育士が手を頭に当てることをやって見せる。

○実践種目Ⅸ「両生類のようなハイハイ」

0歳児の最初のハイハイである。このころの子どもの足はまだ胴に対していくらか横向きで、腕の力も弱いので、腕やおなかを床からもち上げることが出来ない。ひじから先、手のひら、5本の指をしっかりと床につけておさえ、身体を左右にくねらせ、足の親指でしっかりと床を後ろにけって前に向かって這わせる。

①ねらい

手を開き、足の親指で床をしっかりと蹴り、ずり這い前進をしていくことが出来るようになっていく。

②実践方法

保育士がずり這い前進をして見せる。保育士の動きを真似ている姿を見ながら、手を開くこと、足の親指で床を蹴って這っていくことを促す。

上記にあげた種目により、リズム遊び・リズム運動の実践を行った。また、これらのリズム遊び・リズム運動の効果や実際に行う時の注意事項は、『改訂版 さくら・さくらんぼのリズムとうた 齋藤公子 (群羊社)』を参照した。

(3) 実践事例

<実践事例Ⅰ>クラスの子どもの様子 (担当児8名)

子ども達一人一人との信頼関係及び愛着関係が構築されてきた5月半ばより、リズム遊び・リズム運動に取り組み始める。

○5月より取り組み始めた種目

『うさぎ』『どんぐりころころ』『金魚』『こうま』『おでこごっつん (柔軟)』

に取り組み始める。この頃の担当児の月齢は6ヶ月～9ヶ月で、寝返りやずり這い前進をしていた頃である。

リズム遊び・リズム運動の種目	取り組み始めて1ヶ月頃の姿	修了期の姿
うさぎ	<ul style="list-style-type: none"> 保育士の動きをじっと見ながら、少し身体を左右に揺らす。ちぐちぐをする際、目が合いにくい子がいる。(3名) 	<ul style="list-style-type: none"> 保育士が口ピアノを始めると、自発的に両膝を屈伸させたり、両足跳びをしようとする。 ほとんどの子が、保育士の動きに注目するようになる。
どんぐりころころ	<ul style="list-style-type: none"> 保育士の真似をして、寝返りをする。(5名) 横になりながら、身体を左右に揺らす。 	<ul style="list-style-type: none"> 全員が自分の進みたい方向へ、ころころと自由に寝返りをする。
金魚	<ul style="list-style-type: none"> 身体を少し揺らして見せる。 身体は動かさずにいるが、首をあげて、保育士の動きを見ている子がいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 身体をくねくねと左右に細かに揺らす。 身体を動かそうとするが、上手く動かせず、保育士に身体を揺らしてもらっている子がいる。(2名)
こうま	<ul style="list-style-type: none"> 保育士の真似をして、四つ足ハイハイをする。(2名) 足の指を床につけずに、四つ足ハイハイをする子がいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ほとんどの子が、高足ハイハイで前進出来る。 いざり這いが改善され、四つ足ハイハイが出来るようになった子がいる。
おでこごっつん (柔軟)	<ul style="list-style-type: none"> 身体を床に向けて傾けようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> 身体を床に向けて傾けようとする。 意識をして床におでこをつけられる子がいる。(4名)

○6月より取り組み始めた種目

『竹とんぼ』に取り組み始める。この頃の担当児の月齢は、7ヶ月～10ヶ月で、寝返りやずり這い前進をよくしていた。また、四つ足ハイハイをする子が1名いた。

リズム遊び・リズム運動の種目	取り組み始めて1ヶ月頃の姿	修了期の姿
竹とんぼ	<ul style="list-style-type: none"> 広げた両手を揺らしながら、回転しているつもりでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> 両手を広げてバランスを取りながら、身体をくるくると回転さ

		せる。 ・歩行が出来ていない子がまだ2名おり、その子たちは、両手を広げながら身体を揺らしていた。
--	--	---

○9月より取り組み始めた種目

『めだか』に取り組み始める。この頃の担当児の月齢は、10ヶ月～1歳1ヶ月で、ずり這い前進や四つ足ハイハイをよくする。伝い歩きをする子が2名いた。

リズム遊び・リズム運動の種目	取り組み始めて1ヶ月頃の姿	修了期の姿
めだか	・歩行が始まった子は、両手を合わせながら歩く。また、両手を合わせずに小走りをしたり、保育室中を歩き回る子がいる。	・ロピアノが聞こえると、両手を合わせて走り出す。 ・歩行が出来なくても、両手を合わせて身体を少し揺らす子がいる。

○11月より取り組み始めた種目

『でんぐり返し』に取り組み始める。この頃の担当児の月齢は、1歳～1歳3ヶ月で四つ足ハイハイやつかまり立ち、伝い歩きをする。また、歩き始めた子が2名いた。

リズム遊び・リズム運動の種目	取り組み始めて1ヶ月頃の姿	修了期の姿
でんぐり返し	・身体を硬直させ、保育士が援助してもスムーズに回転出来ず、体勢を崩してしまう子がいる。	・両手を床にしっかりとつけて、保育士の援助でスムーズに回転出来る。(6名)

○平成24年1月より始めた種目

『かくれんぼ』に取り組み始める。この頃の担当児の月齢は、1歳2ヶ月～1歳5ヶ月で歩き始めた子が4名、その他の子どもは伝い歩きやつかまり立ち、また、まだ四つ足ハイハイの子もいた。

リズム遊び・リズム運動の種目	取り組み始めて1ヶ月頃の姿	修了期の姿
かくれんぼ	・保育士の動きをじっと見ている。	・保育士の合図でしゃがみ、両手

	<p>る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・立位の体勢のまま、両手を頭につける子がいる。 	<p>を頭につけることが出来る子がいる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・歩行は出来るが、しゃがむことが出来ない子がいる。 <p>(3名)</p>
--	---	--

○2月より取り組み始めた種目

『両生類のようなハイハイ』に取り組み始める。この頃の担当児の月齢は、1歳3ヶ月～1歳6ヶ月で歩き始めた子が5名、その他の子どもは伝い歩きやつかまり立ち、また、まだ四つ足ハイハイの子もいた。

リズム遊び・リズム運動の種目	取り組み始めて1ヶ月頃の姿	修了期の姿
両生類のようなハイハイ	<ul style="list-style-type: none"> ・保育士の真似をして、ずり這い前進するが、両足を床につけずに、手だけでずり這い前進をする子がいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の進みたい方向へ、スムーズにずり這い前進して行くことが出来るようになるが、中にはまだ足の指を床につけずに前進して行く子がいる。(2名)

<事例Ⅱ>腹筋・背筋及び脚力が弱かったAちゃん

○入園時の本児の姿(生後7カ月)

- ・健康…良好
- ・哺乳…それまで母乳での哺乳だったため、ミルクでの哺乳が進み難い。
- ・睡眠…哺乳が一定量飲めるようになると、睡眠も安定してとれるようになった。
- ・言語…「まんまんま…」と喃語を発するが、笑顔が少ない。
- ・運動…左右バランス良く寝返りを良くして遊ぶ。
仰向けにて、頭と足で支えて腰を浮かせることが多かった。

○特記事項

- ・発達検査…1歳6ヶ月健診時に歩行が開始されておらず、その後水沢病院にて発達専門の医師による発達検査を受ける。(1歳7ヶ月～1歳9ヶ月)

○リズム遊びの実践と本児の成長及び課題点

Aちゃんと同じ月齢のBちゃんの姿と比較しながら、本児の成長の姿と課題点について追っていく。

リズム遊び・ リズム運動の種目	Aちゃん・Bちゃんの姿	Aちゃんの課題に対する 保育士の関わり
うさぎ (5月より取り組む)	<p>○8ヶ月 (『うさぎ』に取り組み始めた頃)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Aちゃん…ちぐちぐ遊びでは、床に両足をつけることが出来るものの、ぐらつくことが多く不安定さが感じられた。 ・Bちゃん…ちぐちぐをすると床に両足をしっかりとつけ、膝の屈伸を力強く行う。また、保育士の姿を見ながら、身体を揺らす。 <p>○10ヶ月 ※Bちゃん…つかまり立ち・伝い歩きをする。</p> <p>○11ヶ月 ※Aちゃん…つかまり立ちをする。</p> <p>○1歳1ヶ月 (『うさぎ』を始めて5ヶ月)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Aちゃん…ちぐちぐをした時に不安定さがだいぶ改善されてきていた。 ※Aちゃん…伝い歩きをする。しかし、下半身のぐらつきが見られる。 ・Bちゃん…保育士の口ピアノが聞こえると、立ち上がろうとする。 ※Bちゃん…歩行が始まる。 <p>○1歳8ヶ月 (『うさぎ』に取り組み始めて 1年2ヶ月)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Aちゃん…立位が安定し、両膝を屈 	<ul style="list-style-type: none"> ・ちぐちぐ遊びは、リズム遊び・リズム運動の時間だけではなく、歌遊びの中にも組み入れ、楽しみながら行えるようにする。 ・下半身の不安定さを改善出来るよう、引き続きちぐちぐ遊びをしたり、斜面の上り下り遊び(滑り台・マットの山)に力を入れる。

	<p>伸させて、保育士の口歌に合わせてるようにリズムをとるような姿が見られた。</p> <p>※Aちゃん…歩行が始まる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Bちゃん…「びよん！びよん！」らしく言いながら、両足跳びをしようとする。 	
<p>どんぐりころころ (5月より取り組む)</p>	<p>○8ヶ月 (『どんぐりころころ』に取り組み始めた頃)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Aちゃん…左右バランス良く寝返りをすることが出来た。しかし、うつ伏せからの寝返りがぎこちない。 ・Bちゃん…ころころと自由に寝返りをしながら、笑みを浮かべる。 <p>○1歳2ヶ月 (『どんぐりころころ』に取り組み始めて6ヶ月)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Aちゃん…自発的に回転することがほとんど見られない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・うつ伏せからの寝返りがスムーズに出来ていくよう、促していく。 ・寝そべったまま動こうとしないことが多くなった。Aちゃんの名前を呼びかけながら、時折足をクロスにさせて、寝返りを促す。
<p>金魚 (5月より取り組む)</p>	<p>○8ヶ月 (『金魚』に取り組み始めた頃)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Aちゃん…床の上に横になったままで、動かずにいることが多い。 ・Bちゃん…頭を左右に揺らす。 <p>○11ヶ月 (『金魚』に取り組み始めて3ヶ月)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・両足首を持って、身体を左右に揺らしてあげる。

	<p>の頃)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Aちゃん…後追いの時期。担任が側で身体を動かしているのので、身体を少し左右に揺らしながら笑みを浮かべる。 ・ Bちゃん…身体を左右に動かそうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 安心してリズム遊び・リズム運動に取り組めるよう、本児が見える場所で行う。
<p>こうま (5月より取り組む)</p>	<p>○8ヶ月 (『こうま』に取り組み始めた頃)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Aちゃん・Bちゃん…ずり這いで前進する。 <p>○9ヶ月 (『こうま』に取り組み始めて1ヶ月)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Bちゃん…四つ足ハイハイをして前進する。 <p>○1歳1ヶ月 (『こうま』に取り組み始めて5ヶ月)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Aちゃん…四つ足ハイハイをして前進する。 <p>○1歳3ヶ月 (『こうま』に取り組み始めて7ヶ月)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Aちゃん・Bちゃん…高這いをするようになったが、そこからの前進はまだ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 足の指を床につけないでずり這い前進していることがあったので、足の指を床につけるよう促す。
<p>おでこごっつん (柔軟) (5月より取り組む)</p>	<p>○8ヶ月 (『おでこごっつん』に取り組み始めた頃)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Aちゃん…お座りが不安定だったため、上体を保育士が支えてあげながら一緒に行う。身体がとても柔らかく、床におでこをつくこ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ お座りが安定しない。そのため、リズム遊びの他に、抱き起こし遊び等も併用しながら、腹筋や背筋の強化を促すよう努

	<p>とが出来ていた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Bちゃん…お座りが安定する。保育士の真似をして身体を前方に傾けようとする。 <p>○ 9ヶ月</p> <p>※ Aちゃん…お座りが安定する。</p>	<p>めた。また、頭部と両足で全身を支える体勢が頻繁に見られていたの で、観察していく。</p>
<p>竹とんぼ (6月より取り組む)</p>	<p>○ 1歳3ヶ月 (『竹とんぼ』に取り組み始めて 6ヶ月)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Aちゃん…身体を揺らしている。 ・ Bちゃん…初めて回転する。 <p>○ 1歳10ヶ月 (『竹とんぼ』に 取り組み始めて1年1ヶ月)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Aちゃん…初めて回転する。 	
<p>めだか (9月より取り組む)</p>	<p>○ 1歳4ヶ月 (『めだか』に取り組み始めて4ヶ月)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Aちゃん…両手を合わせながら、身体を揺らす。 ・ Bちゃん…両手を合わせながら歩く。 	
<p>でんぐり返し (11月より取り組む)</p>	<p>○ 1歳3ヶ月 (『でんぐり返し』に取り組み 始めた頃)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ Aちゃん…保育士の補助で回転することが出来たが、首元少しぐらつくのが気になった。 ・ Bちゃん…回転がとてもきれい。回転後に、笑い声をあげる。自分から床に両手をつけて、高這いの体勢になることもある。保育士に援助してもらい、回転することが出来ると面白いようで、笑い声をあげる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 首元のぐらつきに気をつけながら、手で支えて介助しながらゆっくりと回転させる。

	○1歳4ヶ月 (『でんぐり返し』に取り組み始めて 1ヶ月) ・Aちゃん…首元のぐらつきが少し改 善された。	
かくれんぼ (平成24年1月より 取り組む)	○1歳4か月 (『かくれんぼ』に取り組み始めた頃) ・Aちゃん…保育士や友達が行ってい るのをじっと見ている。 ・Bちゃん…しゃがむことが出来る。 また、両手を保育士の合 図で頭にのせることが出 来る。	・だっこし、Aちゃんに声 を掛けながら一緒に行 い、反応を見る。
両生類のような ハイハイ (2月より取り組む)	○1歳5ヶ月 (『両生類のようなハイハイ』に 取り組み始めた頃) ・Aちゃん…足の指を床につけずに、 ずり這い前進をすること がある。 ・Bちゃん…足の指を床につけて、ず り這い前進をする。	・足の指を床につけて前進 していくことが出来る よう、促す。

○Aちゃんの発達の視点

	発達の視点
食事	<ul style="list-style-type: none"> ・口の開きが小さく、咀嚼が弱めだったが、口を大きく開けてよく噛んで食べられるようになった。自分から手やスプーンを使って、毎日完食をしてよく食べた。 ・汁物、自分でコップやお椀を手で持ち、飲むことが出来るようになった。(1歳)
睡眠	<ul style="list-style-type: none"> ・午睡、2時間ぐっすりと眠ることが出来るようになった。(8ヶ月～)
情緒	<ul style="list-style-type: none"> ・担当保育士に愛着を示し、後追いが見られるようになったが、1か月程で落ち着いた。(1歳)
発語	<ul style="list-style-type: none"> ・「まんまんまん」「なんなんなん」等と、よく喃語を話すようになった。(11ヶ月～) ・「まんま」と、単語をはっきりと発するようになった。(1歳) ・「いた」「あった」と、よく発するようになった。(1歳1ヶ月)

	<ul style="list-style-type: none"> ・「どうぞー」「ないない」「ぽーん」「ねんね」と、単語をよく発するようになった。(1歳2ヶ月)
運動	<ul style="list-style-type: none"> ・滑り台遊びでは、力強い足の蹴りで、頂上まで登っていくことが出来るようになった。(10ヶ月) ・反り返りが見られなくなった。(1歳1ヶ月～)
表現	<ul style="list-style-type: none"> ・“あわわ”や手たたき等、保育士の動きを真似たしぐさが増えた。(8ヶ月) ・舌を出して、いたずらっぽい表情をして見せることもあった。(9ヶ月) ・“おいしい”という手で頭をなでるしぐさを、よくするようになった。(1歳1ヶ月) ・絵画は、横の線を描くようになった。(1歳1ヶ月) ・“おいでおいで”と、手を振るしぐさが見られるようになった。(1歳2ヶ月) ・表現発表会の練習において、遊戯の終わりに人差し指を頬につけて、ポーズをとって見せるようになった。(1歳3ヶ月) ・“ちょうだい”“どうも”のしぐさをするようになった。(1歳5ヶ月)

(4) Aちゃんのプロテクト者との連携

入園当初は、本児を保育園に初めて預ける不安から、父母ともに言葉数が少なく、担任保育士から話しかけられてやっと笑みを浮かべる程だった。一方で、連絡帳では、家庭での本児の姿について毎日細かに記載があった。

父母ともに、心を開いて担任保育士と話をすることが出来るよう、登園時には温かな言葉がけと関わりに努めた。また、降園時には本児の1日の様子について詳しく伝え、家庭での本児の様子も尋ねながら、情報交換をする中で、父母の表情が徐々に穏やかになり、自分から本児の家庭での様子について、よく話すようになった。

また、健診の結果についてはあまり悲観せずに、これから徐々に良くなっていくという希望を持ちながら、保育士に細かに報告してくれた。

担任保育士より、園で本児が出来るようになったことを伝えられると、にっこりとほほ笑みながら嬉しそうな表情を見せ、成長の喜びを一緒に分かち合ってくれた。

7. 研究の成果と課題

(1) 成果

本園の0歳児保育にリズム遊び・リズム運動を取り入れるにあたり、入園期の4月より、子ども達一人一人とのまなかいや、身体と身体の触れ合いを大切にしながら、わらべうた遊びや赤ちゃんマッサージ、布やバスタオルを使用し

でのいないいないばあ遊びや引っ張り遊び、くすぐり遊び等を通して信頼関係を構築することが出来るように努めた。中には、母から離れて保育園生活を送ることになったことで、不安な気持ちや生理的欲求から泣き出してしまう子どもたちもいたので、一人一人の思いを受け止め、ゆったりとした雰囲気の中で情緒的かつ応答的な関わりに努めることで、情緒の安定を図るようにした。

それらの積み重ねが、子ども達一人一人との信頼関係の構築につながり、リズム遊び・リズム運動に取り組み始めるにあたっての土台となり得た。保育士がロピアノを始め、楽しげに身体を動かして見せると、始めはじっと保育士の動きを見ていた子ども達が、徐々に自発的に身体を揺らし始めるようになった。そうして、0歳児クラスを修了する時には、自分の身体を自在に動かすことが出来るようになってきた喜びの表情を浮かべながら、のびのびと床の上で転がったり、四つ足ハイハイをしたり、身体をくるくると回転させたり、膝を屈伸させたり、しゃがんだりするようになった。リズム遊び・リズム運動を通して、子ども達は保育士のロピアノを聞きながら、身体を思い通りに動かすことが出来るようになってきた楽しさや喜びを、全身で感じる事が出来るようになったのである。

中でも、身体が硬直してしまい自発的に身体を動かすことが出来ずにいた子は、身体の柔軟性が徐々に養われ、自発的に身体を動かそうとする意欲が見られるようになった。あやしても笑わない子は、声を出して笑うようになった。また、目が合わない子は、保育士のことをじっと見て、動きを真似ることが出来るようになった。保育士の言葉掛けに対する反応がなかった子は、喃語や単語をよく発して反応するようになった。離乳食や食事が進みにくかった子は、意欲的にもりもりと食べられるようになった。午睡でぐっすり眠ることが出来なかった子は、ぐっすり眠られるようになった。

発達に遅れが見られていたAちゃんも、なかなか思うように身体を動かさず、意欲的に身体を動かそうとしない時期もあったが、保育士の発達のポイントを押さえた働きかけにより、徐々に自発的に身体を動かし、笑みを浮かべながらリズム遊び・リズム運動に取り組めるようになった。身体の柔軟性はあるが、下半身の安定さに欠け、はいはいや歩行に遅れが見られていたが、正常児と比較してゆっくりではあったが、発達の順序に基づき四つ足ハイハイや歩行も出来るようになり、本児だけではなく、他の保育士や父母とも成長の姿を喜び合うことが出来た。

(2) 課題

リズム遊び・リズム運動の実践を通して、「子どもたちへの援助の仕方は、この方法で良いのだろうか。」また、「子ども達の発達の順序性を大切にしたい種目

の選定がきちんと出来ているのだろうか。」と疑問に感じたり、不安に思うことがあった。しかし、理論研究を深めていく中で、少しずつ疑問や不安が解消されていった。今後、さらなる学びを深めていくためには、理論と実践、実践後の振り返りをより大事にしていく必要がある。

今年度、0歳児期～1歳児期とリズム遊び・リズム運動を一緒に取り組んだ子ども達が3歳児となり、再び担当することとなった。リズム遊び・リズム運動の中でも、特に3歳児の課題種目である“スキップ”に意欲的に取り組み、のびやかかつしなやかな身体の動きを見せる子ども達一人一人の成長の姿を喜びながら、今現在の個々の課題点を見出し、リズム遊び・リズム運動だけではなく雑巾がけや畑活動にも力を入れている。

今回の研究を通して、リズム遊び・リズム運動が子ども達の成長発達を大いに促し、よく褒め、認め、出来たことを一緒に喜び合うことの積み重ねの中で、子ども達一人一人の情緒の安定をも図ることが出来るものと確信することが出来た。これらのことを土台とし、子ども達の発達の順序性を大切にしながら、子ども達が『ヒトの子として生まれ、真に人間の子どものために』、0歳児期から卒園期まで長い目で見ながら、今後もリズム遊び・リズム運動に取り組み、子ども達の成長発達を促していきたいと考える。

<参考文献>

『保育所保育指針<平成20年告示>』 厚生労働省（フレーベル館）

『改訂版 さくら・さくらんぼのリズムとうた』 齋藤公子（群羊社）

『子どもたちは未来—乳幼児の可能性を拓く—第Ⅰ期』

齋藤公子・小泉英明（かもがわ出版）

『子どもたちは未来—乳幼児の可能性を拓く—第Ⅱ期』

齋藤公子・小泉英明（かもがわ出版）

『ブック 齋藤公子のリズムと歌[楽譜集]』 齋藤公子記念館（かもがわ出版）

『発達がわかれば子どもが見える』 田中真介（株式会社ぎょうせい）